

「父と母を離れ」

2005.7.17

赤羽聖書教会主日礼拝説教

15. 神である主は、人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。

16. 神である主は、人に命じて仰せられた。

「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。

17. しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。

それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」

18. その後、神である主は仰せられた。

「人が、ひとりているのは良くない。

わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」

19. 神である主が、土からあらゆる野の獣と、あらゆる空の鳥を形造られたとき、

それにどんな名を彼がつけるかを見るために、人のところに連れて来られた。

人が、生き物につける名は、みな、それが、その名となった。

20. こうして人は、

すべての家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名をつけたが、人にはふさわしい助け手が、見あたらなかった。

21. そこで神である主が、深い眠りをその人に下されたので彼は眠った。

それで、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉をふさがれた。

22. こうして神である主は、

人から取ったあばら骨を、ひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。

23. すると人は言った。

「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。

これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。」

24. それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。

25. そのとき、人とその妻は、ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった。

説教

エデンの園の「エデン」とは、「贅沢な」「優美な」とか、「楽しい」「喜ばしい」といった意味です。

神さまは、「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」(創世記 1:28)とご命令なさいました。そして、人を「エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせ」(2:15)しました。「耕す」と訳されている言葉の本来の意味は、「奉仕する、仕える」です。「奴隷」という言葉も、同じ語根で表現されます。神さまのご命令通りに「生み、増え、地を満たし、地を従え、地上の全被造物を支配する」働きというものは、全被造物に向かって偉そうにふんぞり返って、ただ威張り散らして命令する、というような働きではなかったということです。そうではなく、むしろ、神さまが造られたすべての被造物に対して「奉仕し、仕える」という、言わば奴隷労働であったのです。つまり、神と共にこの世界を治める働きは、要す

るに世界に仕える「奴隷労働」でありました。それはイエスさまが言われた通りです。

「あなたがたも知っているとおりに、異邦人の支配者たちは彼らを支配し、偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。

あなたがたの間では、そうではありません。

あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。

あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、あなたがたのしもべになりなさい。

人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、

また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」（マタイ 20:25-28）

しかも、このような世界を支配する奴隷労働を、最初の人間は嫌々ながら渋々行ったのでは決してありません。そうではなく、むしろ「楽しく」「喜んで」行ったのであります。人は、自分に与えられた労働を神さまが自分に与えてくださった天職として受け止め、そこに生きがいと満足感、充足感を見出しながら、感謝と喜びをもって精一杯奉仕したのでした。労働が苦痛となり空しく思えるようになったのは人の墮落以降のことであり、墮落以前の人間は、たとえ苦勞したとしても、そこにも有意義な意味を見出すことができました。そして、感謝と喜びをもって、迷いなく奉仕に励むことができたのでした。

そのように神のみわざに励む人間の「助け手」ということで、神さまは、人間のあばら骨を取って、それで女を形づくって男にお与えになります。すると、男は

「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉！

これを女と名づけよう。

これは男から取られたのだから。」（2:23）

と、女を歓迎する喜びを爆発させます。こうして、墮落以前のエデンの園では、労働の喜びに加えて、家庭生活に於いても喜びが満ち溢れておりました。何より、夫婦の間に、互いを心から歓迎し、喜び合う、至福の喜びが一杯に満ちていたのです。そこで、創世記の記者は、夫婦の喜びを総括してこう締めくくります。

「それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。」（創世記 2:24）。

「それゆえ」というのは、その前の節を受けて結論づけている文だからです。もともと男も女も一つでありました。彼らは一つからただでありました。女は男のからだの一部から造られました。だから、男が最初に女を見た時、

「これこそ、今や、

私の骨からの骨、私の肉からの肉！

これを女と名づけよう。

これは男から取られたのだから。」

と、自分のからだから実に見事に美しく造られた女を見て、感動し、興奮して、その喜びを爆発させたのでした。彼ら、最初の夫婦は、身も心も、共に一つに結ばれておりました。「それゆえ」：だからこそ、「男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである」と聖書は解説します。どうして、人は結婚するのか？～父と母の元を離れて。それは、彼らがもともと一つから

だであって、身も心も共に一つに結ばれていたからだよ、と聖書は私たちに教えてくれるのです。一体だったんです。一心同体でした。だから、男は女を求めし、女も男を求めます。彼らが身も心も求め合うのは、彼らが身も心も一つであったからです。だから、出会った時、この上なく興奮しました。欠けていた自分の一部、失われていた自分の一部と出会って、「これぞ！我が骨の骨、肉の肉」と興奮したのです。

「それゆえ、

男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。」

「男はその父と母を離れ、」の「離れ」と訳される言葉は、「離れる、捨てる、見捨てる、残す、ないがしろにする、置き去りにする、(助言を)退ける、放っておく、手放す」といった意味の言葉です。例えば、申命記 31:6 にはこうあります。「強くあれ。雄々しくあれ。彼らを恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主ご自身が、あなたとともに進まれるからだ。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。」あるいは、サウル王が神を「捨てて」他の神々に仕える、という場合にもこの言葉が使われます。人を置き去りにする、牛を置き去りにする、そうかと思えば、「悪者はおのれの道を捨て」(イザヤ 55:7)と、人が神の教えを「捨てる」ということを表現する際にも使われています。

つまり、ここで言う「父と母を離れ」といわれている言葉の本当の意味は、敢えて正確に訳せば「父と母を捨てて」ということです。親に対する未練をキッパリと捨てて、親を残して、親を見捨てて、親を置き去りにして、親をないがしろにして、親を放っておいて、男は女と結婚すると言うのです。

結婚と言うのは、男と女がふたりきりで結婚するのであって、親付きで結婚するものではありません。親に対する未練を完全に捨てて、つまり、親を捨てて、親を見捨てて、結婚するのです。この認識が不十分だと、結婚生活は不十分な結婚生活であると言えるでしょう。夫婦間のトラブルの原因の多くは、「父と母を離れ」ることの不充分さにあると言っても過言ではありません。

例えば、結婚した男女が、結婚した後も、自分の親を頼ったり、親に依存したりする場合などはそれに当たると思います。何か困ったことがあったら、自分の妻や夫に相談しないで、真っ先に自分の親に相談するとしたら、どうでしょうか？自分の妻に対する不満、自分の夫に対する不満を、直接伴侶に打ち明けることなく、自分の親に相談したら、どうなるのでしょうか？そうなれば、自分たち夫婦ふたりだけの問題では済まされなくなります。「よくもうちの可愛い娘に酷い真似しやがって！」とか、「よくもうちの可愛い息子を足蹴にしたわね！」といったふうに、両家の家を巻き込んだ全面戦争になってしまいます。そうすると、收拾がつかなくなります。夫が妻を差し置いて、自分の母親とホットラインを持っていて、「自分の妻は家事をやらない」とか、「いつもラーメンばかり食べさせられている」とか、「全然言うこと聞かない」とか、「自分をアゴで使う」といったように、いつも自分の妻への不満をたらたら告げ口していたら、「あんなバカ嫁と早く離婚してしまいなさい」と言われるのがオチです。一方、妻が夫婦喧嘩して自分の実家に帰ってしまったら、「もうあんな奴のところに戻ることもなかねえ！」と言われてしまうことでしょう。そうすると、問題がどんどん大きくなります。夫婦の問題を第三者の教会の牧師に相談するのは良いと思いますが、夫婦の問題を自分の親に相談すれば、問題がもっと複雑化して、問題の解決がつかなくなってしまいます。

結局、親への依存を脱して、親からの自立ということがあってこそ、すなわち、「父と母を離れて」こそ、健全な夫婦関係、健全な家庭を築くことができるのです。また、このようなことの原因となるものですが、必ずしも自分の親に伴侶に対する不満をぶちまけなくとも、無意識的に、精神的に親から自立できない場合もあります。これは、男の場合には、エディプス・コンプレックスということになるし、女の場合には、エレクトラ・コンプレックスということになるでしょう。男の場合には、自分の母親から精神的に脱

することができないのです。例えば、自分の妻と自分の母親を比較してしまう、というようなことです。あるいは、自分の夫を自分の父親と比較してしまう、ということです。そして、自分の母親・あるいは自分の父親は自分の我が儘をよく聞いてくれて、とても優しく良くしてくれた、それなのに、自分の夫、あるいは妻は、さっぱり自分に対して良くしてくれない、ということ、勝手に失望して、嘆いて、不満に思う、ということです。自分の伴侶に、自分の親の性質と役割を求めてしまうのです。飯作ってくれないとか、耳垢取ってくれないとか、優しくしてくれないとか、頼りないとか、それで不満に思うのです。親の役割と伴侶の役割は当然違います。たいして立派な人間でなくても、自分の子どもに対しては母性本能、あるいは父性本能が働きます。でも、自分の伴侶は自分の子どもではないので、当然のこと、そんなものは働きません。でも、相手にしてみたら、自分の親が自分に対してしてくれたことを伴侶がしてくれないので、不満に思うのです。簡単に言えば、どうして自分の夫はパパのようじゃないの、パパみたいにやってくれないの、ということになるでしょうし、夫にしてみれば、どうして自分の妻はママのようにボクに優しくしてくれないの、ということになるでしょう。これは、いくつになっても同じです。年が若くても、年を経ても、同じです。こういう、甘ったれた、親に対する依存を脱却できない、自立できない夫婦関係が離婚の原因になるのです。

ですから、聖書の教える通りです。

男は「その父母を離れ」て、妻と結婚するのです。

「父と母を離れ」ることのできない夫婦は、健全な夫婦関係を築くことができません。そして、健全な子育てをすることもできず、健全な家庭を築くことができません。聖書が教える健全な夫婦関係は、「父と母を離れ」ということの上に築き上げられるものです。

「それゆえ、

男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。」

この「妻と結び合い」の「結び合い」と訳される言葉の意味は、「しがみつく、すがりつく、くっつく、まといつく、親しく交わる、親密になる、へばりつく、泊まる、追いつく、追い迫る、離れない、(罪を)やめようとしなない、(骨が)皮と肉にくっつく、(神の戒めを)堅く守る、執着する、固執する、執着する、愛着する、しっかりとくらいついて、離れない」という意味です。例えば、「私は、あなたのさとしを堅く守ります。」(119:31)は、「私はあなたの定めにすがっています。」の意味で、神さまに結びつく、執着する、固執する、執着心、愛着心を表現します。反対に、神さまの御心に沿わないものに対しても異常な執着心を見せる場合にも使われます。申命記 13:17 には、神に捧げられるべき聖絶の物について、それを「何一つ自分のものにしてはならない」と命じられています。ソロモン没落の原因の一つは、異邦人の女に対する愛着心でありました。「それなのにソロモンは彼女たちを愛して離れなかった」(列 11:2)このマソラテキストが「ソロモンは愛のために彼女たちにくらいついた」となっていて、何があっても、それこそ神に背いてでも、絶対に自分の掴んだものを文字通り死んでも離さないありさまを表現しております。

それが、「妻と結び合い」と表現されている言葉の意味です。それは、尋常ならぬ執着心をもって必死にくらいつく、すがりつく、へばりつく、固執する、愛着して離れない、死んでも妻を離さない、という意味です。生半可な覚悟ではない、一度結婚したら、絶対に離婚しない、髪を振り乱しても、服を破られても、恥も外聞も打ち棄てて、とにかくなりふり構わず、死んでも妻を離さない、それが結婚の契りなのです。少なくとも、旧約の創世記の記者が考えていた「結婚」というものは、そういう結婚なのです。

私たちがただならぬ執着を示すべきは、「父と母」との関係ではありません。そうではなく、「夫婦の関係」でなければなりません。

「父と母」とは離れるべきであるのに対して、「夫婦」の間は決して離れてはならないのです。親子と夫婦はどっちが大事ですかと聞かれれば、世の人は意外と多く親子の関係が大事と答えますが、しかし、聖書は、「夫婦」が大事だと答えます。なぜなら、親子は、離れた方が良いというのに対して、夫婦は決して離れてはならない、そして、それは「一体となる」関係だと言います。親子は他者だし、他者とならねばならないが、しかし、夫婦は一体なのです。「一体」という言葉は、日本語の訳語ピッタリに「一つのからだ」、「一つの肉」という言葉です。夫婦は何をするにも一緒です。夫婦は身も心も一緒です。夫婦は一心同体なのです。

もしも、親孝行するなら、夫婦ふたりで親孝行すべきです。「父母を捨てて」とありましたが、それは夫婦関係を考える上での話でありまして、聖書は決して親をないがしろにすることを教えておりません。むしろ、「父と母を敬え」と教えます。「自分の肉親の世話をしない者は、不信者より悪い」とも教えます。だから、父と母は敬うべきなんです。充分に、十二分に、精一杯、父と母を敬って、父と母のために奉仕すべきです。しかし、父と母は敬うべきなんです、それは疑う余地もないんですが、でも、自分の伴侶を飛び越えてはならない、ということです。自分の伴侶以上に、自分の父と母を愛してはならないということです。順序があるんです。自分の伴侶をまず大事にして、自分の伴侶をまず愛して、それから今度は二人で自分たちの親に敬意を表するのです。親は当然敬うべきですが、しかし、妻は、あるいは夫はそれ以上の存在、すなわち自分と一体なんです。

「それゆえ、

男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。」

ここに集うみなさん一人一人が、「その父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となる」という夫婦のすばらしさを正しく味わい、その喜びを世に証して、神の栄光をあらわして生きていかれるよう、祈ります。